

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530136

研究課題名（和文） 「アダムズ家」の精神とアメリカ保守主義の再検討

研究課題名（英文） The Political Thought of *Adamses* and Reexamination of American Conservatives

研究代表者

石川 敬史（ISHIKAWA TAKAFUMI）

東京理科大学・基礎工学部・講師

研究者番号：40374178

研究成果の概要（和文）：本研究は、アメリカ史における政治思想の展開を「アダムズ家」の思想と行動から考察し、アメリカ政治思想史における保守主義という強力かつ曖昧な政治概念に新たな視座を提供しようという試みである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is an attempt to propose a new point of view about the political notion of Conservatives that is ambiguous but influential in the history of American political thought. The distinctive aspects of this research are considerations of thoughts and actions of *Adamses*.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2010 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2011 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2012 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |

研究分野：政治学

科研費の分科・細目：アメリカ政治思想史

キーワード：大統領制度、連邦政府、アメリカ革命

1. 研究開始当初の背景

(1)私は、アメリカ史上最初の「保守主義者」とされるジョン・アダムズ（第二代大統領）の政治思想を研究してきた。しかし、アメリカという政治空間において、何をもって「保守主義」と定義するかはまったく自明ではない。

(2)ルイス・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』（1955年）によれば、ヨーロッパの如き伝統をもたないアメリカは自由主義から始まったのであり、それゆえ保守とリベラルの違いは、

アメリカ自由主義についてのコンセンサスを前提とした、政治志向の差異に過ぎないのであり、アメリカ社会が恐れるべきは抑制力をもたない自由主義という「保守主義」への同調圧力であるという。

(3)しかし、今日の多元的アメリカを理解しようという場合、こうした「コンセンサス」を無条件に受け入れることはできない。その一方で、「コンセンサス」が自明ではないにも関わらず、アメリカ政治には、常に「保守的」な側面が認められるのもまた事実である。

(4)以上のような矛盾した状況を解明するために、研究者たちは次の二つの手法を用いてきた。

①政治思想的な手法

第一は、建国以来のアメリカ政治思想史の再考する方法である。まずは西欧政治思想史におけるリベラリズムの意味内容が、アメリカにおいてはまったく異なる位相をとっている背景が確認される(佐々木毅、『アメリカの保守とリベラル』、1993年など)。そしてトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』で考察された市民概念が崩壊している状況が悲嘆的に概観される(シーダ・スコッチポル、『失われた民主主義』、2003年など)。S・ウォリンは、『アメリカ憲法の呪縛』(1989年)において、その崩壊はレーガン政権期に決定的となったと論じる。

②政治史的な手法

古矢旬『アメリカ 過去と現在の間』(2004年)における考察のように、諸保守思想を歴史的な脈にそって分類・検討する手法がある。また久保文明編著『G・W・ブッシュ政権とアメリカの保守勢力—共和党の研究』(2003年)では、保守勢力が多様であることがそもそもの前提とされている。これらの諸研究から、イラク戦争以降のいわゆる「ネオコン」の政権からの後退は、アメリカ保守勢力全体から観るならば必ずしも大きな出来事ではないことが推定される。この推定は、フランシス・フクヤマ『アメリカの終わり』(2006年)によっても裏書きされよう。

(5)以上の研究手法は、アメリカの保守主義と言う流動的な概念を補足するのに、一定の効果があったことは確かである。しかしその一方、曖昧な概念を曖昧なままに描いてきたとも思われた。ここにおいて、政治思想的な手法と政治史的な手法を融合した、新たな視座を提供できないかという考えに至った。

2. 研究の目的

(1)本研究は、アメリカ史における政治思想の展開を「アダムズ家」の思想と行動から考察し、アメリカ政治思想史における保守主義という強力かつ曖昧な政治概念に新たな視座を提供しようという試みである。

(2)近年論じられなくなった「保守政治家としてのアダムズ」論を取上げて再検討することによって、アメリカ史における中央権力と分権的秩序、およびその相互作用の中での市民概念の変遷をアダムズ一族という定点から観測し、アメリカ合衆国における「保守する精

神」を明らかにすることを目指した。

(3)本研究の特色は、「アダムズ家」という、アメリカ史において極めて異質な一族を通して保守主義を再考しようという試みにある。保守主義研究において「アダムズ家」が有効な分析概念である理由は以下の三点である

①アメリカにおいて保守主義が多様かつ変遷する概念であるのに対して、「アダムズ家」の思想は一貫して動かない。近年のアダムズ研究の特徴は、アダムズの先見性と柔軟性を見出そうとする傾向があるが、アダムズ家の卓越性は変化しないことにある。それゆえ、社会変化を浮き彫りにする。

②ジェファソニアン・デモクラシー(1800年)、ジャクソニアン・デモクラシー(1828年)、および革新主義時代とすべてのデモクラシーの波に敗北している。すなわち、アメリカ政治史上重要な政党再編に「アダムズ家」は関わってきた。

③しかしながら、今日に影響する政治理論、外交政策、社会思想、教育理論の多くを「アダムズ家」は文書として残している。つまり、「アメリカ的な何か」を常に体現してきた。

(4)以上の観点から、「アダムズ家」の政治思想研究は、アメリカ史のみならず政治学全体に有益な視座を提供すると思われる。

3. 研究の方法

(1)本研究の性格は、「アダムズ家」というアメリカ最高の知性を総合的に検討する試みである。そのために必要なのは、地道な「文献解読・分類・整理」と、他分野の研究者への「発信」と「交流」である。具体的には下記の手順で研究作業を行った。

①ジョン・アダムズの息子ジョン・Q・アダムズの事跡を、孫のチャールズ・フランシス・アダムズの残した文献を検討する。

②ジョン・アダムズの曾孫ヘンリー・アダムズの家伝 *The Education of Henry Adams* の分析を中心に研究作業を行う。

③以上の検討を通して得られた材料を、アメリカン・デモクラシーという観点から再構成する

(2)上記研究活動を確実に推進するため、学会報告、大学紀要、学会誌への発表日・締切日をチェック・ポイントにするよう心がけた。

4. 研究成果

(1)本研究は、アメリカ合衆国第二代大統領ジョン・アダムズ、第六代大統領ジョン・Q・アダムズ、連邦下院議員・駐英大使を務めたチャールズ・フランシス・アダムズ、および思想家ヘンリー・アダムズという、「アダムズ家」の人々の政治思想を検討し、アメリカ政治思想における、「アダムズ的なもの」を明らかにしようという試みである。

(2)ジョン・アダムズは、アメリカ建国の父たちの中の第一人者とされながらも、アメリカ革命の物語の中では、忘れられた人物として人々の記憶にとどまっている。その後のアダムズたちも、アメリカ政治に常にかかわりを持ちながら、少数派にとどまり続け、ヘンリー・アダムズの代には、政治一族であることから、事実上の追放をされた。

(3)しかしアメリカン・デモクラシーの物語における、敗者としてあり続けたこの一族の政治思想は、しかしながらアメリカン・デモクラシーにおける「何者か」であり続けた。アメリカの政治思想における「アダムズ的なもの」とは、以下の七点である。

①アメリカの政治文化をヨーロッパとは異なるものとして定義した。

②身分制なき世界における市民のあり方を定義した。

③ピューリタニズムそのものを再定義して教会秩序と市民政府との分離を定義した。

④アメリカ外交思想をヨーロッパの伝統的な外交スタイルとは異なるものとして定義した。

⑤アメリカ国内の地域間対立解消の理論的基礎を与えた。

⑥アメリカにおいて、intellectualsが政治的に疎外される原理的構造を体現した。

⑦アメリカにおける「様々な保守主義」とは異なる、アメリカ保守主義の原型を体現していた。

(4)本研究で明らかになったことは、研究代表

者にとっても予想を超えるものであった。それは、アメリカにおける「保守主義」の体現者とされてきた「アダムズ家」の政治思想は、本質的急進的なものであったことである。

(5)本研究の学術的特色は、私が大学院進学以来継続してきた、アメリカ合衆国建国史研究の成果を、現代アメリカ政治思想における保守主義理解の基礎に据えていることにある。こうした古典的手法を継承・発展させることは、今後のアメリカ政治研究に重要な役割をもつだろうと思われる。

(6)本研究の独創的な点として、アダムズ研究それ自体の推進がある。今日、アダムズ研究の重要性を否定する研究者はいないが、現実には日本のみならずアメリカにおいてもその数は極めて少ない。特に本研究のような本格的な「アダムズ家」の政治思想研究は日本で最初のものとなるだろう。また、近年衰退している「通史」という困難な論述方法が、「アダムズ家」を柱に据えることで可能となると思われる。

(7)強力ではあるが曖昧、かつ多様でしかも変遷する「アメリカの保守主義」を考察する上での重厚な基盤を構築する手がかりを与えることになるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

①石川敬史、アメリカ啓蒙の覚書、東京理科大学紀要、査読無、45号、2013、257-280

②石川敬史、『ザ・フェデラリスト』と建国期アメリカの思想対立、政治思想研究、査読無、第12号、2012、24-51

③石川敬史、アメリカ建国期における政党政治の契機(下)、東京理科大学紀要、査読無、44号、2012、177-202

④石川敬史、アメリカ建国期における政党政治の契機(上)、東京理科大学紀要、査読無、43号、2011、125-147

[学会発表] (計 3 件)

①石川敬史、大西洋辺境の道徳哲学再考：田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像』を読む、社会思想史学会、2012年10月28日、一橋大学

②石川敬史、ジョン・アダムズにおける共和主義とピューリタニズム、日本アメリカ史学会、2011年9月17日、北九州市立大学

- ③石川敬史、『ザ・フェデラリスト』と建国
期アメリカの思想対立、政治思想学会、
2011年5月28日、姫路獨協大学

〔図書〕(計 1 件)

- ①上智大学アメリカ・カナダ研究所、上智大
学出版、キリスト教のアメリカ的展開—継承
と変容、2011年、85-104

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 敬史 (ISHIKAWA TAKAFUMI)
東京理科大学・基礎工学部・講師
研究者番号：40374178

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：